

一 冊 の 贈 書

One of the presented book

金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室

古 川 俣

西暦2000年まであと3年に迫り、医学の世界では来る21世紀は脳の時代、あるいは感覚器の時代とも言われています。このことは、最近のテレビの特集番組や時間待ちで立ち寄る駅の構内、飛行場の本屋の書籍類からも実感するところです。私の専門である耳鼻咽喉科学は、一口で言うと感覚医学と頭頸部外科学に集約できますが、私の教室では感覚器の中でも特に嗅覚の研究が歴代教授によって継続されてきた経緯から、現在でも積極的に押し進められています。私が所属する日本味と匂学会も昨年で創立30周年を迎えましたが、昨年末大変光栄にも、この会の創始者の一人で、現在名誉会員でもある高木貞敬群馬大学名誉教授から出版間もない著書「脳を育てる」(岩波書店)を拝受することができました。先生は神経生理学の大家で特に嗅覚面においては著書も多く、わが国が世界に誇る基準嗅覚検査「T&T」の生みの親でもあります。この書では、人の脳の働きは神経細胞どうしのネットワークの多さ、強さで決まり、その神経細胞は一日平均10万個ずつ減って、脳の働きは衰える一方、刺激によって新しいネットワークがつけられることなど紹介してあります。興味あるところは脳の働きを高めるために何をなすべきかの提案であります。老後のボケを恐れる人は、是非一読されてはどうか。忙しくて読めない人のために項目だけを紹介しますが、項目だけではボケ防止にはならないことを申し添えます。まず脳の働きをよくする方法は、①問題に直面して逃げない、②よい書物を読む、③情報を選択して取り入れる、④未知の分野に目を向ける、⑤いい友人を持つ、⑥特技や趣味をもつ、⑦自分の意見を正確に相手に伝える、⑧多くの人と話しあう、⑨歴史を学ぶ。ついでに脳の働きを悪くするものとして、①テレビの悪影響、②責任の回避、転嫁、③不平ばかりを言う、他人の批判ばかりする、④悲観・あきらめ・絶望、⑤この年ではもう遅いと思うこと、が掲げてあります。

古い話になりますが、私が学生時代を結構楽しんだ部類であります。御当地ソングの「♪♪謡(ウタ)がふるふる加賀宝生の～」にもあるように、学生時代を金沢で

暮らすことになった私に対して知人、親戚の饒は、「金沢というところは街中から謡曲が聴こえ、学校の小使いさんまで謡う土地柄だから、謡曲ぐらい謡えるようになって帰ってこい」というものでした。この言葉が頭から離れなかった私は入学式後のオリエンテーションで即、能楽部に入部し、それ以来卒業までの6年間、学生本文そこそこに能楽堂通いを続けました。詰め襟と金ボタンの学生服姿で見台(ケンダイ)に向かって正座する自分の姿が週刊誌「朝日ジャーナル」で全面的写真入りで掲載されたり、全国宝生流学生能楽連盟の会長をつとめたことなど、学生時代イコール能楽三昧の生活で得られたことは、多少なりとも日本の古典芸能に直接触れることができた満足感と、いい友人に巡り会えたことにつきます。人はみな、考え方や者の見方、好き嫌いがちがっているから、友人をもつことで自分の知らない世界を見せられたり、自分の持っている未開発の部分に光をあてられたりして、思いがけない自分の能力が引き出されたり、高められたりすることが可能となります。つまり、先の高木流に言えば、いい友人が脳の働きを高めることになるのだと思います。

一方昔から「芸は身を助く」と言われます。本職以外に一芸に秀でた者は、思わぬところでそれが役に立つことを意味した諺ですが、私のような素人でもそれに近い恩恵に浴したことは幾度か経験しました。何か一つ特技か趣味を育てていくことは、これも高木流に言えば、それに関係したニューロンの連絡網が成長し、本職のそれと、脳の中で相互に協力し関連しあい、脳の活動を全体として高めることになると思われれます。いづれにしても、私にとって師匠の渡辺容之助先生を介しての幅広い人間交流が自分の人間形成にかけがえのないものであったことだけは疑いありません。師とは習い事によく言われる堅苦しく、厳しい師弟関係ではなく、実の兄貴分のような付き合いをさせていただきましたが、当時は学生の特権であたりまえのように思っていたことが、いかに凶々しい浅はかな考えであったか、今思い出すと赤面する次第です。